

特別支援学校(病弱)における児童・生徒への 入院初期からの復学支援の検討

— 当事者のニーズと地元校・特別支援学校教職員の意識に着目して —

令和7年度 神奈川県立総合教育センター
長期研究員 飯田 隆弘(県立横浜南支援学校)

【研究の概要】

本研究では、特別支援学校(病弱)の入院初期からの復学支援の取組について各種実態調査を行い、その在り方を検討した。その結果、入院初期の児童・生徒、保護者は、「地元校とのつながり」が途切れることへの不安を強く抱えている実態が浮き彫りになった。また、現状の特別支援学校(病弱)の復学支援体制は、退院直前の時期に偏重しており、入院初期から組織的に当事者のニーズを把握し、不安軽減に向けて地元校と連携していく取組が不十分であることが明らかになった。これらの課題に対し、本研究では、入院初期に生じがちな支援の空白とつながりの途切れを防ぎ、児童・生徒が安心して復学できる環境を実現するために、入院初期からの組織的な復学支援システムの構築や、地元校に対する働きかけと体制整備の支援を提言する。

【病気療養児の教育について】文部省(1994)

病気療養児本人及びその保護者の気持ちを考慮し、当該病気療養児の教育に関し、入院前に通学していた学校と転学先の病弱養護学校等との間の密接な関係が保たれるよう努めること。

【令和4年度 病気療養児に関する実態調査結果】
文部科学省(2023)

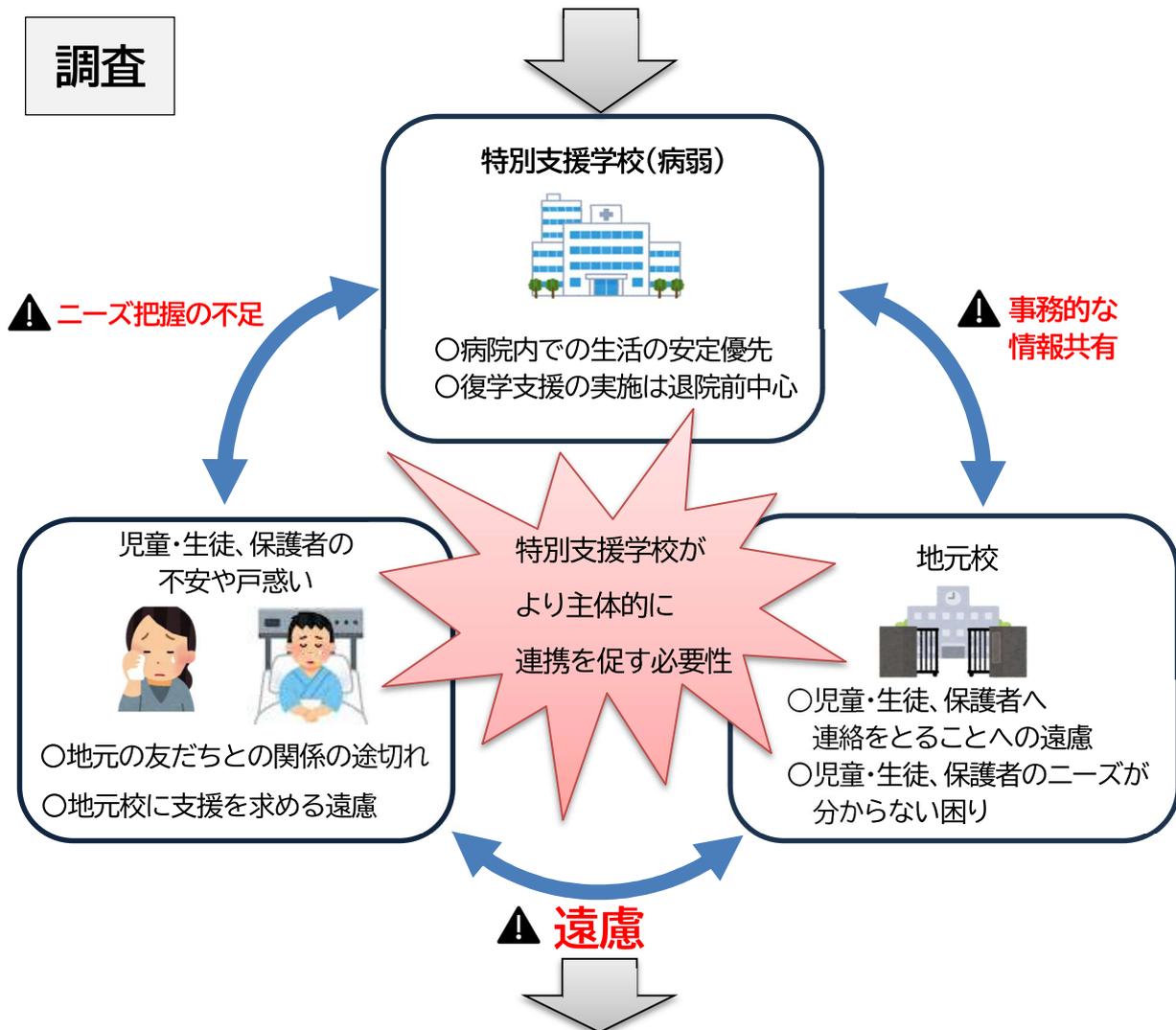
前籍校等との交流及び共同学習の実施 15%

【先行研究が指摘する復学支援の課題】

- ・入院初期からの特別支援学校(病弱)と地元校の連携不足
- ・当事者のニーズと地元校の支援内容の乖離

入院初期の対応に課題がある可能性

調査



提言

特別支援学校(病弱)における「入院初期からの復学を見据えた組織的な支援システム」の構築

- 児童・生徒、保護者のニーズの早期把握・顕在化
- 教育相談 CO を中心としたチーム支援
- 具体的連携へ移行する手順の標準化

特別支援学校(病弱)による地元校への働きかけと体制整備の支援

- 「復学が前提の転籍」という意識の共有
- 多様な支援選択肢の提示
- 担当者の明確化と組織的支援体制の示唆

はじめに

平成6年度の文部省通知「病気療養児の教育について」では、病気療養児が転学した際には、学習の継続性を確保し、退院後の円滑な復学を支援するために、入院前に通学していた学校と病弱養護学校等の間で密接な連携をとることを求めている。

こうした連携において、「連絡協議会」は多角的な情報共有や復学に向けた連携の確認の場として、また「交流及び共同学習」は児童・生徒の心理的な安定や地元校とのつながりを維持する機会として、それぞれ重要な意義を持つとされている(全国特別支援学校病弱教育校長会 2009)。しかし、「令和4年度病気療養児に関する実態調査」(文部科学省)を見ると、96%の学校が「地元の学校との連絡・調整を行った」と回答した一方で、「入院時等の連絡協議会の実施や参加」は50%の実施に留まっている。さらに、「前籍校等との交流及び共同学習」の実施率は15%と、極めて低い水準にある。これらの実施率が低調である要因や、実際の現場でどのような連携が行われているかという詳細な実態までは、この調査では明らかになっていない。

「連携」の重要性と課題は、先行研究でも指摘されている。平賀(2016)は、地元校¹への復学を円滑なものとするには、関係者が入院中の児童・生徒、保護者の地元校に対する思いについて把握し、地元校との「心理的なつながり」を維持できるよう、必要に応じて橋渡しをすることが求められているとし、かつ復学に向けた連携は児童・生徒の「入院初期」から行われることが有益であると述べている。

また、中村・寺戸(2025)は、入院前から退院後のそれぞれの時期におけるニーズ調査を行い、児童・生徒、保護者が希望する支援と地元校が行った支援に乖離が生じていることを明らかにしている。ただし、この調査は対象者数が限定的であり、当事者の思いや地元校教員の困りを十分に把握しきれていないという課題も残されており、対象を広げた更なる検証が望まれる。

以上のことから、入院初期における支援を充実させるために、児童・生徒、保護者のニーズと地元校の意識、そして三者間の連携の課題を把握する必要がある。その上で、特別支援学校の橋渡し機能を復学支援²の仕組みの中に明確に位置付けることが、円滑な復学支援に向けて有効であると考えられる。

研究の目的

入院初期³における児童・生徒、保護者のニーズ、地元校の意識、および特別支援学校(病弱)の支援の実状を把握し、三者の連携における課題を明らかにすることで、入院初期からの関係者間のつながりを維持し、円滑な復学につなげる支援体制の構築を目的とする。

研究の内容

1 研究方法

入院初期における実態や課題を多角的に検討するため、以下の4種類の調査を実施した。まず、調査1において広域調査を行い、その上で調査2～調査4において、特別支援学校(病弱)の1校(所属校)を対象とし、より具体的な実態把握のための調査を行った。それぞれの調査対象等は表1のとおりである。

表1 調査の全体像

調査1	対象	関東甲信越地区の特別支援学校(病弱)21校の支援会議等の運営担当者
	目的	特別支援学校(病弱)の転入初期 ⁴ における復学支援の実状と課題を把握する。
調査2	対象	特別支援学校(病弱)に在籍する児童・生徒8名とその保護者8名
	目的	入院初期における不安や要望を把握する。
調査3	対象	入院中の児童・生徒の地元校の担任29名
	目的	入院中の児童・生徒への支援の状況や地元校担任の困りを把握する。
調査4	対象	調査対象特別支援学校の教職員57名
	目的	調査対象特別支援学校における地元校との連携の実態と意識を把握する。

(1) 調査1 関東甲信越地区の特別支援学校(病弱)における復学支援の実態調査

ア 調査の概要

関東甲信越地区の特別支援学校(病弱)が転入初期、中期、後期に行っている復学支援とその課題について把握するためにアンケート調査を行った(表2)。

1 特別支援学校(病弱)に転籍する前に在籍していた学校のこと。
2 復学に向けて児童・生徒に対して行われる教育支援全般のこと
3 本研究では調査における便宜上、入院日から30日程度と設定する。また、入院中期を入院初期と入院後期の間の期間、入院後期を退院日の見通しが立ってから退院するまでの期間とする。
4 本研究では調査における便宜上、転入日から30日程度と設定する。また、本研究で調査対象とした児童・生徒は入院日から転入まで平均13日となっており、転入初期に行われる支援は入院初期の支援と重なるため、本研究で定義する「入院初期」と実質的に同義の期間を指すものとして分析を行う。

表2 関東甲信越地区の特別支援学校(病弱)の実態調査の概要

対象	全国病弱虚弱教育連盟加盟の関東甲信越地区の特別支援学校(病弱)21校の支援会議等の運営担当者
方法	Microsoft Forms
実施時期	令和7年9月16日(火)～令和7年10月3日(金)
調査内容	児童・生徒への復学支援の意識と課題の把握
回収率	71%(有効回答件数15件)

イ 分析方法

単純集計を行い、各入院時期の回答数を比較した。自由記述の回答については、文脈に沿ってカテゴリーに分類し、質的分析を行った。

ウ 調査の結果と考察

特別支援学校(病弱)が各時期に「児童・生徒、保護者と地元校をつなぐ支援」をどの程度実施しているか確認したところ、転入初期の実施率が最も低く、26%に留まる結果となった(図1)。

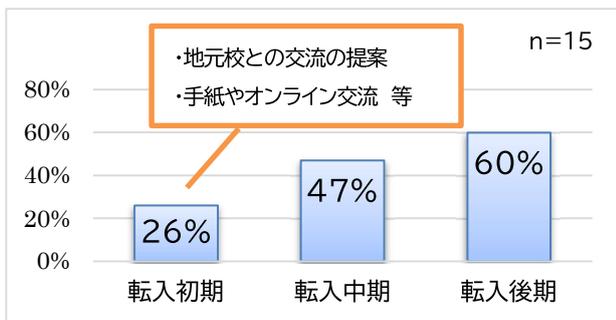


図1 各時期に児童・生徒、保護者と地元校がつながれるような取組の実施率と内容

同様に、「各時期の支援会議の実施状況」においても、転入初期の実施率は26%に留まっており、多くの特別支援学校(病弱)で転入初期における情報共有やつながりを維持する支援が十分に実施されていない現状が明らかになった(図2)。

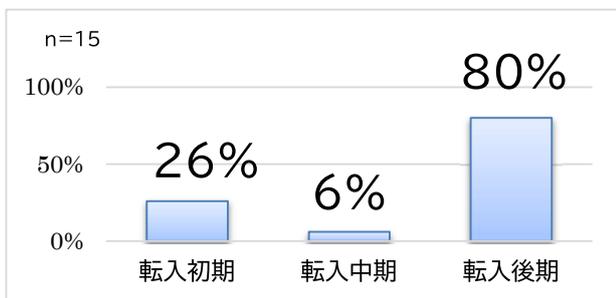


図2 各時期の支援会議の実施率

また、特別支援学校(病弱)が「児童・生徒」に対して各時期に行っている要望の確認を見ると、「特別支援学校(病弱)に対する要望の確認」は転入初期が最も高く、時間経過とともに下降する傾向が見られた。対照的に「地元校に対する要望の確認」は転入初期が最も少なく、徐々に上昇する傾向にあった(図3)。この

傾向は保護者への聞き取りにおいても同様であった(図4)。

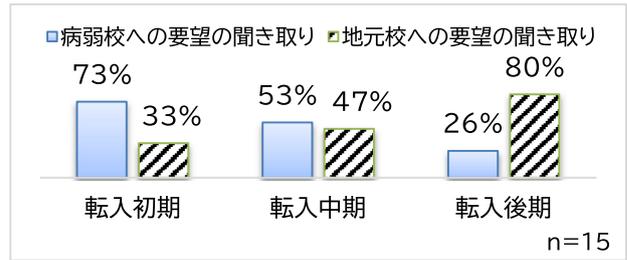


図3 児童・生徒の要望の確認

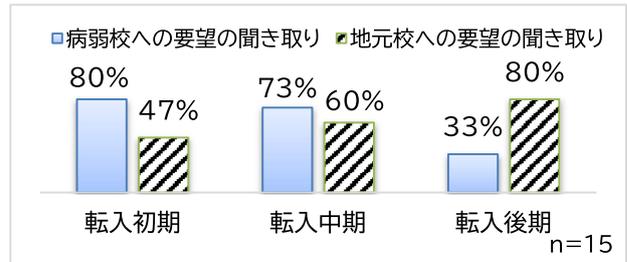


図4 保護者の要望の確認

また、転入初期の復学支援の取組においては、特別支援学校への適応を優先しているので復学支援を初期には行わないという声もあった(表3)。

表3 転入初期の対応に関する意見

- ・まず本校に通うことを重視しているため、初期段階は復学支援を行っていない(原文ママ)。
- ・実施していない又は空欄6校

以上の結果から、多くの特別支援学校(病弱)においては、時期に応じて支援の重点の置き方が異なる実態が浮かび上がった。すなわち、初期は「院内生活への適応」、中期以降に「地元校との連携・復学準備」へシフトするという段階的な支援モデルが定着していることが推察される。

(2) 調査2 特別支援学校(病弱)に在籍中の児童・生徒及び保護者へのインタビュー調査

ア 調査方法

後述する倫理的配慮を前提として、筆者がインタビューとなり、協力者1名につき30分程度の半構造化面接を実施した。面接の内容は協力者(児童・生徒の場合は保護者も含む)の許可を得て録音した。

イ 対象者

対象特別支援学校に在籍する児童・生徒とその保護者、計8組16名に依頼し、15名から承諾を得た。対象者の内訳は小学生4名、中学生3名、及び保護者8名であった(うち1組は、生徒の体調不良により保護者のみ実施)。インタビュー時における入院期間は1ヵ月程度が3名、6ヵ月前後が2名、1年前後が2名、2年前後が1名である。なお、本調査の対象者の主たる入院理由は身体疾患である。

ウ 実施時期

令和7年9月16日(火)～令和7年10月2日(木)に実施した。

エ 内容

入院初期・中期・後期における不安や特別支援学校(病弱)および地元校への要望を聴取するため、児童・生徒用と保護者用のインタビューガイドを作成し、半構造化面接を実施した。なお、入院後期に関する不安については、退院時の状況を想定した回答を求めた。

オ 倫理的配慮

本研究の実施にあたり、協力者に対して、調査の趣旨、所要時間、録音の実施、個人情報の保護、および得られたデータを研究目的以外に使用しない旨を書面にて説明し、署名による同意を得た上で実施した。

カ 分析方法

面接の録音データをもとに逐語録を作成し、分析対象とした。逐語録から文脈を考慮して意味単位で記述を抽出し、ラベリングを行った。得られたラベルを時期ごとに「不安」「安心」「要望」という区分で分類・整理した(表4)。分析の信頼性確認作業では、当センターの指導主事1名に、意味単位の抽出とラベリングの判断基準を伝え、筆者の内容分析が適切に遂行されているか確認した。

また、表の【 】に書かれたものがラベルである。なお、斜体で示した記述は、児童・生徒、保護者のインタビューから得られた発話を、原文の意味を変えない範囲で改編したものである。

キ 調査の結果

児童・生徒の逐語録からは249の意味単位が抽出され、21のラベルが抽出された。保護者の逐語録からは269の意味単位が抽出され、25のラベルが抽出された(全ラベ

ルの一覧は巻末資料1を参照)。なお、本稿の考察において中心的な論点となるラベルを、整理したものを(表4)に示す。

ク 考察

入院初期の保護者の不安や安心に係るラベルとしてb-③【地元校との関係の途切れ】とb-⑧【地元校とのつながりの実感】が抽出されたことから、入院初期から地元校との関係を継続することは、保護者支援として重要であることが示唆された。なお、入院初期において児童・生徒、保護者双方から「要望」が抽出されなかった理由として、平賀(2016)が指摘するように、心身の状態が安定しない状況では、病気のこと以外には意識が向きにくいと考えられる。

入院中期の児童・生徒の不安や安心に係る共通の要素としてa-⑨・a-⑭<地元校や友だちとのつながり>が抽出された。また、児童・生徒の言葉からは入院が長期化することにより、地元とのつながりが途切れやすい状況であることがうかがえた。この結果は、入院初期の保護者支援と同様に、児童・生徒に対しても地元校や友だちとの関係継続が必要であることを示している。

こうした「地元とのつながりの途切れやすさ」に関連していると考えられるラベルとしてa-⑦・b-⑩【進級時の地元校所属クラスの消失】b-⑫【地元校への遠慮】及びa-⑥・b-⑨【地元校の消極的姿勢】が抽出された。【進級時の地元校所属クラスの消失】については、入院中に進級することで、地元校での所属クラスが把握できなくなり、復学するクラスが分からないま

	区分	a 児童・生徒	b 保護者
入院初期	不安		b-③【地元校との関係の途切れ】 ・友だちとの関係が切れてしまうような気がして辛かった。
	安心		b-⑧【地元校とのつながりの実感】 ・入院時の応援メッセージをもらい嬉しかった。
	要望		
入院中期	不安	a-⑥【地元校の消極的姿勢】 ・地元校の教材をもらえないか相談したが対応してもらえなかった。	b-⑨【地元校の消極的姿勢】 ・オンライン授業の相談をしたが、検討もなく拒否され残念だった。
		a-⑦【進級時の地元校所属クラスの消失】 ・入院中に進級したので新しいクラスが分からない。	b-⑩【進級時の地元校所属クラスの消失】 ・復学するクラスが直前に決まり復学の準備に忙しかつたので、進級時にクラスが決まっていれば良かった。
		a-⑨【地元校や友だちとの関係の途切れ】 ・友だちからの連絡が最近なくなり忘れられたと感じる。	b-⑫【地元校への遠慮】 ・30人以上担当していらっしゃる中、在籍していない身なのでお願いしづらいところがある。
	安心	a-⑭【地元校や友だちとの関係維持】 ・部活の顧問の先生が異動した後も連絡をくれて嬉しかった。 ・SNSを通じて、友だちと継続的に連絡を取れている。	b-⑭【地元校や友だちとの関係維持】 ・地元校担任から連絡をいただけると安心する。 b-⑬【特別支援学校教員からの地元校との関係継続の促し】 ・地元校とのつながりの継続を特別支援学校担任に促され、地元校と関係を継続できた。
		要望	
入院後期	不安	a-⑰【地元校での新しい人間関係への不安】 ・入院初期に関係が途切れてしまい、戻り時の人間関係が不安。	b-⑯【地元校内での情報共有の不足】 ・地元校の中で情報が共有され、配慮してもらえないか不安。
		a-⑱【再発への懸念】 ・接触等で怪我が悪化することが怖い。	
	安心	a-⑲【復学支援会議の安心感】 ・会議を行ったことで不安が軽減された。	b-⑲【復学支援会議の安心感】 ・地元校の先生に主治医から直接注意事項を伝えてもらえてよかった。
要望	a-⑳【地元校との情報共有の要望】 ・医療上の制限や学習進度等を地元校の先生に伝えてほしい。	b-⑳【地元校との情報共有の要望】 ・医療上の配慮など地元校担任に共有してもらいたい。	

ま過ぎすことへの不安や困惑があることが語られた。また、保護者から抽出された【地元校への遠慮】では、在籍していないことや地元校教員の多忙さを気遣い、地元校に支援を求めることを躊躇してしまう等、心理的なハードルがあることが明らかになった。さらに、【地元校の消極的姿勢】も保護者が支援を求める上での心理的なハードルを一層高くする要因となっていると推察された。

これに関連して、保護者からb-⑳【地元校行事参加のマニュアル整備の要望】が抽出された。これは、マニュアルが整備されることで、保護者が地元校への支援を呼びかける際の負担感が軽減されることを期待するものである。

また、現状においてつながりを維持できている要因として、b-⑲【特別支援学校教員からの地元校との関係継続の促し】というラベルも抽出された。これは、保護者が遠慮を感じる状況下において、特別支援学校(病弱)からの働きかけが地元校とのつながりを保つ一助となっている様子を示唆している。

入院後期には児童・生徒、保護者共通のラベルとしてa-⑰・b-㉑【地元校での新しい人間関係への不安】が挙げられた。この不安は、入院初期からの継続的な関わりや、進級後の所属クラス情報の共有があれば軽減された可能性が考えられるものであり、入院初期から地元校と児童・生徒、保護者とのつながりを維持する必要性が示唆された。

加えて、児童・生徒からはa-⑱【再発への懸念】が存在することが語られており、これに関する情報共有について、保護者からも不安と要望が挙がっている。一方で、安心の要素としてa-⑳・b-㉒【復学支援会議の安心感】が抽出されていることから、地元校・医療機関・特別支援学校(病弱)の緊密な情報共有が児童・生徒、保護者の安心に寄与していることが改めて示された。

(3) 調査3 入院中の児童・生徒に対する地元校からの関わりや支援に関する実態調査

ア 調査の概要

児童・生徒が入院中に地元校が行った支援や感じた困りを把握するためにアンケート調査を実施した(表5)。

表5 入院中の児童・生徒に対する地元校からの支援に関する実態調査の概要

対象	児童・生徒が特別支援学校(病弱)に転籍している又は転籍していた小学校又は中学校29校の担任
方法	Microsoft Forms
実施時期	令和7年9月16日(火)~令和7年10月17日(金)
調査内容	児童・生徒の入院中に地元校が行った支援と地元校が感じた困りの把握
回収率	65%(有効回答件数19件)

イ 分析方法

単純集計を行い、内容を比較した。自由記述の回答については、文脈に沿ってカテゴリーに分類し、質的分析を行った。

ウ 調査の結果と考察

地元校に対し、入院初期に「把握できた情報」と「把握しなかった情報」を尋ね、その結果を比較した(図5)。結果、全ての項目において「把握できた情報」が「把握しなかった情報」を下回っていた。

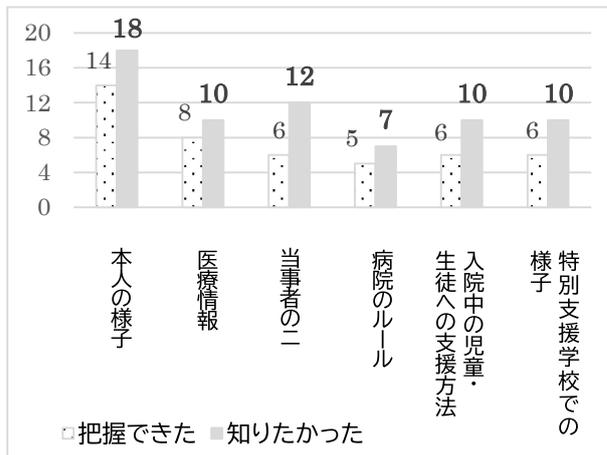


図5 入院初期における情報収集の状況

また、「入院初期の情報収集に関する困り」では、地元校側から保護者に連絡をすることを躊躇する様子が確認された(表6)。

表6 入院初期における地元校の情報収集の困り(原文の趣旨を変えない範囲で改編)

- ・教員から手術の経過などを保護者の方に聞くのは気が引ける。
- ・教員から保護者に連絡を入れてもいいものかどうか苦慮した。

「入院中の児童・生徒に対して行った支援」では「教室内の座席の維持」や「プリント配付」は半数以上の学校が行っているが、学級との交流など児童・生徒と直接関わる支援については大幅に下回った(図6)。

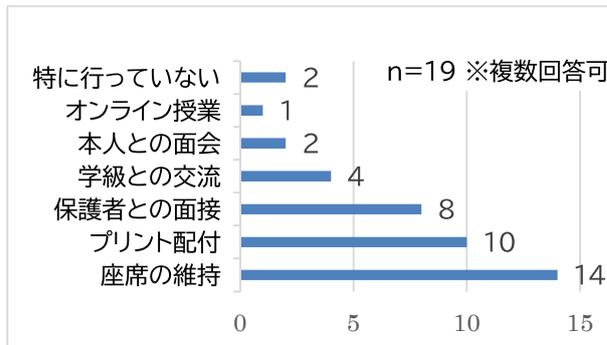


図6 地元校が入院中の児童・生徒に行った支援

また、入院中の児童・生徒への支援の方法について知りたいという意見もあり、入院中の児童・生徒と関わる機会の少なさや支援方法を知る機会の少なさが伺えた(表7)。

表7 入院中の児童・生徒への支援方法についての困り(原文の趣旨を変えない範囲で改編)

・入院中に取り組むべきことがあれば教えてもらいたい

一方、「入院中の児童・生徒との関わりで、困っていることはありますか」という質問には、小・中学校、合わせて89%が「困っていない」と回答している(図7)。これらのことから、地元校は入院中の児童・生徒、保護者のニーズを十分に把握することができず、繋がりを継続する意義や支援の方法が分からずに取り組みしていない可能性が示唆される。

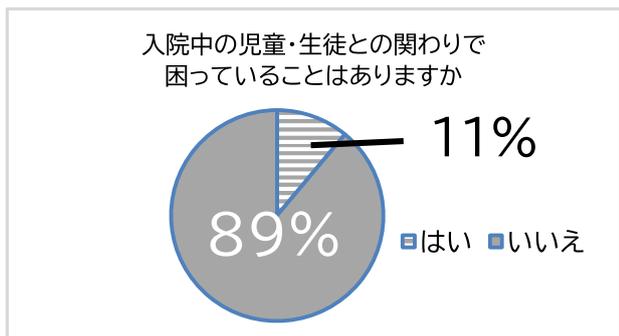


図7 入院中の児童・生徒との関わりについて
(4) 調査4対象特別支援学校における地元校との連携に関する実態と意識調査

ア 調査の概要

対象特別支援学校の教職員を対象に、各時期に特別支援学校(病弱)の教職員が行っている地元校との連携の実態と課題を把握するためにアンケート調査を行った(表8)。

表8 特別支援学校(病弱)における地元校との連携に関する実態と意識調査の概要

対象	対象特別支援学校の教職員 57名(非常勤含む)
方法	Microsoft Forms
実施時期	令和7年9月1日(月)～令和7年9月12日(金)
調査内容	各時期に特別支援学校(病弱)の教職員が行っている地元校との連携の実態と意識の把握
回収率	98%(有効回答件数 56件)

イ 分析方法

自由記述の回答を、文脈に沿ってカテゴリーに分類し、時期ごとに比較しながら質的分析を行った。

ウ 調査の結果と考察

調査の冒頭で、復学支援の定義を「病気療養児に対して復学に向けて行われる教育支援全般のこと」と提示した上で、各時期にそれぞれが行っている復学支援について確認したところ、次に示す結果となった(図8)。これは調査1の結果と同様であり、地元校との連携は転入後期に偏重していることが分かった。

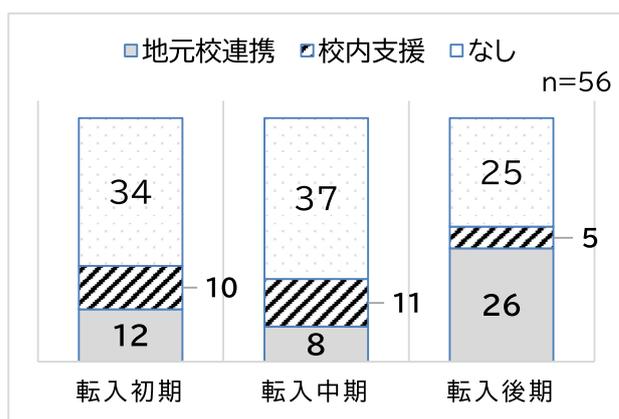


図8 各時期に行っている復学支援について

また、転入初期における地元校との連携に関する内容では、「学習状況・配慮事項の共有」が多くを占めており、「児童・生徒、保護者と地元校との今後のつながりの模索」は2名に留まっていた(図9)。

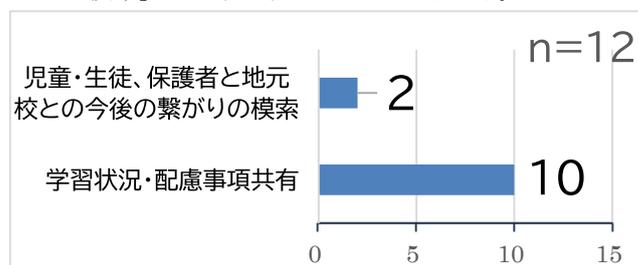


図9 転入初期における地元校との連携の内容

一方で、各時期に行っている復学支援について「なし」という回答も目立つが、これは復学支援を「復学に向けた教育支援全般」と広く捉えておらず、「支援会議」や「地元校との学習状況の共有」という狭義の意味で捉えているためと推察される。「あなたが考える復学支援には、どのようなものがありますか」という質問への回答からもそのことが伺える(表9)。

表9 それぞれが考える復学支援(原文の趣旨を変えない範囲で改編)

- ・転籍する際の引継ぎ
- ・児童・生徒の退院時に行うもの
- ・復学支援会議
- ・復学支援会議に関わったことがないので詳しくは分からない

このように多くの教職員が復学支援を「引継ぎ」や「会議」といった特定の局面に限定して捉えている傾向が伺える。そのため、本来は日々の授業や関わり自体が、「復学支援」に関わる重要な要素であることが認識されにくい状況にあると考えられる。以上のことから、地元校と直接連携を行う担任や支援会議を運営する教育相談コーディネーター(以下教育相談COとする)以外の教職員は、(図8)の質問に「なし」と答えていると推察される。これは、何が復学支援にあたるのかという共通理解が図られておらず、組織的なチーム支援体制が十分に構築されていない可能性を示唆している。

2 研究の総合考察

本研究の4種類の調査から得られた結果を基に、入院初期における復学支援の課題を考察する。調査全体を通して浮き彫りになった最大の課題は、児童・生徒、保護者が支援を必要とする「時期」や「内容」と、学校側が実際に提供する支援との間に生じている「ズレ」の存在である。本節では、この「ズレ」がなぜ生じてしまうのか、その背景にある要因について、支援の時期、情報共有、そして実施体制の三つの観点から考察する。

(1) 支援提供のタイミングと当事者ニーズの「ズレ」を改善するための取組の必要性

調査2の結果から、児童・生徒、保護者は、入院初期から地元校や地元の友だちとの関係が途切れることへの不安や潜在的ニーズを抱えていることが明らかになった。これに対し、調査1・4が示す特別支援学校(病弱)の現状では、地元校と児童・生徒、保護者をつなぐための支援会議や試験登校などの復学支援が「入院後期」に偏重していた。平賀(2016)は、円滑な復学のために入院初期から連携を行うことの有益性を指摘しているが、実態は目の前の入院生活への適応を優先し、地元校とのつながりを目的とした支援が後手に回る傾向にある。この支援提供のタイミングと当事者ニーズの「ズレ」が児童・生徒、保護者の復学への不安を増大させていると言える。したがって、「入院初期」から児童・生徒、保護者のニーズを聞き取る仕組みを構築する必要がある。

(2) 連携における情報共有の不足と「遠慮の構造」を改善するための連携の在り方

調査3では、地元校が入院中の児童・生徒の様子や求めている支援について知りたいと思っているにもかかわらず、十分に情報が伝わっていない現状と、情報不足の中でも入院中の児童・生徒との関わりに「困っていない」ことの乖離が明らかになった。この「情報の不足」と「困っていないという認識」の乖離は、地元校が十分な対応ができていないから「困っていない」のではなく、児童・生徒、保護者の抱えるニーズが伝達されていないために、そもそも対応すべき課題を認識できていないことを示唆している。中村・寺戸(2025)は、当事者が希望する支援と地元校が行った支援が合致しない部分があることを明らかにしているが、本研究の結果は、そうした支援の不一致が生じる背景に、ニーズの未伝達という要因があることを裏付けるものである。結果として、地元校が捉える「支援」が、座席維持やプリント配付といった事務的・形式的な範囲に留まっており、令和4年度の文科省調査の「前籍校等との交流及び共同学習」の実施率が15%という低さが示すとおり、当事者との直接的なつながりを生む支援にまで至りにくい状況にあると考えられる。

また、この背景には制度的な要因も推察される。児

童・生徒の「転籍」によって、一時的にでも地元校の児童・生徒ではなくなることが、組織として支援を継続する必然性や責任感を希薄にさせていることも推察される。転籍により自校の学籍簿から外れることは、単に心理的な距離を生むだけでなく、学校の業務上において対象児童・生徒の存在を「見えにくく」させてしまう側面がある。本研究で見られた地元校の慎重な姿勢は、前述したように正しくニーズが伝わっていないことに加え、こうした制度的な壁の影響を受けていると推察される。

こうした制度の背景に加え、保護者と地元校の心理的な壁も調査2・3から明らかになった。保護者の多くは地元校とのつながりが途切れることに強い不安を抱えているものの、「籍がないこと」や「地元校の多忙さ」を気遣い、連絡や支援を求めることに「遠慮」が生じているが、地元校側も入院直後の保護者に連絡をとることへの「遠慮」がある実態が明らかになった。この互いに遠慮している状態を解決する役割が特別支援学校(病弱)に強く求められていることも明らかになった。

(3) 「個人の取組」から「組織的な対応」への転換

調査2において、地元校と児童・生徒、保護者の関係が維持された好事例(オンライン授業を経て修学旅行に参加した事例)が見られた。この事例では、特別支援学校教員が保護者への助言を行い、入院初期から積極的に地元校へ働きかけたことが起点となっている。しかし、こうした入院初期から児童・生徒、保護者と地元校のつながりの維持を目的とした支援は、現状では担任個人の意識や経験に依存していることが示唆された。また、こうした「特定の教員に依存した支援」となってしまう傾向は、地元校側においても、同様に見受けられる。調査2から明らかになったように、入院中の児童・生徒が進級した場合、児童・生徒の地元校内における所属が不明確となり、地元校側の窓口は前年度の担任が継続して行っている。これは、地元校として児童・生徒を組織的な支援の対象として捉えられていない場合、担当者の異動や多忙化により、支援が途切れてしまう懸念がある。したがって、担任個人の力量に左右されない「組織的な復学支援体制」の確立が不可欠である。教育相談COを中心としたチーム支援への転換や、連携手順の明確化により、特定の教員間だけでなく、管理職等を含めた「組織対組織」の連携を働きかけていくことこそが、継続的かつ安定した支援を保障する鍵になると考える。

研究のまとめ

1 提言

調査結果が示すとおり、現状の復学支援は入院後期の時期に偏重しており、かつ担当教員の個人の力量に

依存する傾向が強い。児童・生徒の円滑な復学を実現するためには、特別支援学校(病弱)の入院初期から組織的に復学支援を実施するための体制と、地元校の復学支援への理解と協力が必要となる。そこで本研究では、以下の2つの提言をする。また、本提言に基づく復学支援のイメージを提示する(図10)。

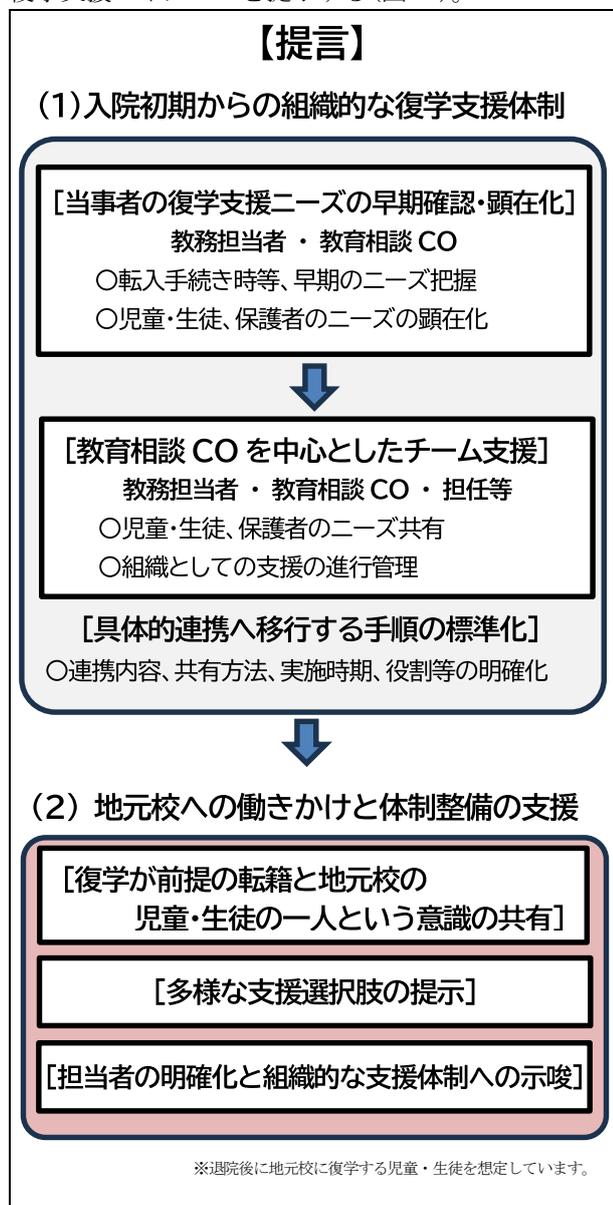


図10 特別支援学校(病弱)における入院初期からの復学支援のイメージ図

(1) 特別支援学校(病弱)における「入院初期からの組織的な復学支援体制」の構築

特別支援学校(病弱)の「入院初期からの組織的な復学支援体制」に必要なと考える要素は以下の3点である。

ア 入院初期における児童・生徒、保護者の復学支援のニーズの早期把握と顕在化

入院初期から学習面のみならず、友人関係や地元校とのつながりに対する不安が生じている。したがって、転入直後の段階から、これらのニーズを多角的に把握する手順を学校のシステムとして定着させる必要があ

る。単なる形式的な情報収集に留まらず、児童・生徒や保護者が抱える潜在的な不安を丁寧に聞き取り、顕在化させていくことが重要である。

イ 教育相談COを中心としたチーム支援への転換

ニーズの把握や地元校との調整を担当のみに委ねるのではなく、教育相談CO等を含めたチームとして対応する体制への転換が必要である。教育相談COが中心となり、組織として支援の進行管理や地元校との連絡・調整を行うことで、担当の経験年数や多忙さに左右されない安定した支援が保障される。また、組織としての関わりは、児童・生徒、保護者や地元校に対する安心感や信頼感の醸成にも寄与することが期待される。

ウ 具体的連携へ移行する手順の標準化

把握したニーズを、地元校との具体的な連携につなげるための手順を標準化する。調査4で見られた入院初期の連携が「情報共有のみで止まってしまう」現状を改善するために、把握したニーズから求められる地元校との連携内容や共有方法を、「誰が、いつ、何を」行うのか、その役割と時期を明確化した「入院初期対応マニュアル」等を整備することが求められる。

(2) 特別支援学校(病弱)による地元校への働きかけと体制整備の支援

地元校教職員が抱く「遠慮」や支援の停滞を解消するためには、単に協力を依頼するだけでは不十分である。病弱教育の専門性に基づいた知識の提供に加え、転籍後も「地元校の担任も、その子にとっての先生であり続ける」という認識の共有、そして特定の教職員に依存しない組織的な支援体制の整備を特別支援学校側から働きかけていく必要がある。

ア 「復学が前提の転籍」と「地元校の児童・生徒の一人」という意識の共有

地元校と特別支援学校(病弱)への転籍は治療のための「一時的な措置」であり、将来的には地元校に復学するという認識を共有できるよう、特別支援学校(病弱)は入院初期に働きかける必要がある。そして、籍が離れることで希薄になりがちな「自分たちの学校の児童・生徒の一人」であるという意識を維持できるよう、入院中も変わらず関わり続ける必要があるという認識を、転籍手続き等の初期段階から繰り返し伝えていくことが求められる。

イ 「多様な支援選択肢」の提示

地元校教員が具体的な行動に移せない要因として、「何をしたらよいか分からない」という戸惑いがある。これに対し、特別支援学校側は、地元校の座席維持からICTを活用した交流まで、児童・生徒の体調や地元校の状況に応じて選択可能な「多様な支援の選択肢」を提示していくことが重要である。具体的な方法や、病院の面会ルール等を明示することで、地元校が見通

しを持って支援に踏み出せる環境を整える役割を担うべきである。

ウ 地元校における「担当者の明確化」と組織的な支援体制への示唆

転籍によって学籍が離れることで、進級等の節目に所属クラスや担当教員が曖昧になり、連絡窓口が旧担任の関わりに限定化されてしまう現状がある。このままでは、教員の異動等により支援が途切れてしまうリスクが高く、学校として児童・生徒の状況を把握できなくなる。したがって、転籍中であっても学年組織の中で「担当者」を明確に位置付けることの必要性を提起していく必要がある。管理職や教育相談CO等を含めた組織全体で当該児童・生徒の情報を共有し、帰属する場所を確保し続ける体制の構築を、特別支援学校側から促していくことが不可欠である。

おわりに

本研究では、現行の枠組みの中での連携の在り方を検討したが、その過程において、入院に伴い「転籍」が必要となる仕組みゆえの児童・生徒、保護者の不安も浮き彫りとなった。将来的には、一部の自治体で導入されている副次的な籍の取組や、不登校支援における柔軟な出席の扱い等を参考に、籍を維持しながら多様な学びが保障される仕組みが、病弱教育全体で検討されることを期待したい。子どもたちが制度の枠組みを超えて、より安心して治療と学習に向き合える未来を願い、本研究の結びとする。

末筆ながら、本研究を進めるに当たり、御協力いただいた関東甲信越地区の特別支援学校(病弱)の皆様、闘病中にもかかわらず、インタビューに御協力くださった、児童・生徒及び保護者の皆様、地元校の教職員の皆様、そして、県立横浜南支援学校の教職員の皆様、本研究に関わっていただいた全ての皆様に深く感謝申し上げます。

[指導担当者]

橋本 綾⁵ 諸星 洋輔⁶ 井出 和夫⁷

引用文献

- 全国特別支援学校病弱教育校長会・国立特別支援教育総合研究所 2009 「病気の児童生徒への特別支援教育病気の子どもの理解のために」
<https://www.nise.go.jp/nc/wysiwyg/file/download/1/11736> (2025年12月16日取得)
- 文部省 1994 「病気療養児の教育について」
<https://warp.ndl.go.jp/info:ndl.jp/pid/11293>

659/www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/t19941221001/t19941221001.html (2025年12月16日取得)

文部科学省 2023 「令和4年度 病気療養児に関する実態調査結果」

https://www.mext.go.jp/content/20231027-mxt_tokubetu02-000032308-1.pdf (2025年12月16日取得)

中村雅子・寺戸武志 2025 「院内学級に通う子どもの復学支援における課題の検討」(『上越教育大学教職大学院研究紀要』第12巻)

<https://juen.repo.nii.ac.jp/record/2000379/files/12.pdf> (2025年12月16日取得)

平賀健太郎 2016 「病弱教育とは 入院中および地域で暮らす病気の子どもの支える教育システム」(『小児看護』第39巻第11号)pp. 1357-1358

参考文献

- 大見サキエ・宮城島恭子・河合洋子・森口清美・畑中めぐみ 2024 『復学支援 どうしていますか? - これまでとこれから -』
- 日下奈緒美 2015 「平成25年度全国病類調査にみる病弱教育の現状と課題」(『国立特別支援教育総合研究所研究紀要』第42巻)
<https://www.nise.go.jp/nc/wysiwyg/file/download/1/1494> (2025年12月16日取得)
- 佐藤忠弘・藤井慶博 2021 「入院により特別支援学校に転学した児童生徒の復学支援システムに関する検討」(『秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要』第43巻) pp. 137-140
<https://air.repo.nii.ac.jp/record/5355/files/jis43%28135%29.pdf> (2025年12月16日取得)
- 滝川国芳 2023 「病気療養する子どもの復学時の不安軽減のための支援システムの検討」(『京都女子大学発達教育学部紀要』第19号)
<http://hdl.handle.net/11173/3716> (2025年12月16日取得)
- 村上理絵・大守伊織・吉利宗久 2022 「重度の慢性疾患のある病気療養児に携わる教員が抱える困難と課題」(『発達障害支援システム学研究』第20巻第2号)
<https://www.jasssdd.org/Journal/pdf/2007.pdf> (2025年12月16日取得)

5 指導主事 6 副主幹(兼) 指導主事

7 教育指導員

巻末資料1 インタビューから抽出されたラベル

	区分	a 児童・生徒	b 保護者
入院初期	感じ不安なこと	a-①【環境の変化】 ・どんな場所でどんな人がいるか分からずドキドキした。	b-①【環境の変化】 ・環境が変わり、気持ちがついていなくて辛い時もあった。
		a-②【学習の遅れ】 ・一人で勉強することで学習が遅れるのではないかと思った。	b-②【学習の遅れ】 ・支援学校だから勉強が遅れるのではないかと思った。
			b-③【地元校との関係の途切れ】 ・友だちとの関係が切れてしまうような気がして辛かった。
	感じ安なこと		b-④【突然の発症による動揺】 ・急に告知を受けショックを受けた。
		a-③【地元校と同程度の授業】 ・地元校と特別支援学校で、授業に大きな差は感じなかった。	b-⑤【地元校と同程度の授業】 ・長期入院が決まったが学校があることも分かり安心した。
		a-④【新しい友人関係の構築】 ・学校があったから、人間関係が上手く築けたと思う。	b-⑥【新しい友人関係の構築】 ・年齢の近い友だちができたことで、安心することができた。
要望	a-⑤【特別支援学校の授業風景】 ・想像以上にみんなが元気で楽しそうにしていたので安心した。	b-⑦【子どもの楽しそうな姿】 ・大きな怪我をして入院したにも関わらず、楽しそうに学校に通う姿を見て安心している。	
		b-⑧【地元校とのつながりの実感】 ・入院時の応援メッセージをもらい嬉しかった。	
入院中期	感じ不安なこと	a-⑥【地元校の消極的姿勢】 ・地元校の教材をもらえないか相談したが対応してもらえなかった。	b-⑨【地元校の消極的姿勢】 ・オンライン授業の相談をしたが、検討もなく拒否され残念だった。
		a-⑦【進級時の地元校所属クラスの消失】 ・入院中に進級したので新しいクラスが分からない。	b-⑩【進級時の地元校所属クラスの消失】 ・復学するクラスが直前に決まり復学の準備に忙しかつたので、進級時にクラスが決まっていれば良かった。
		a-⑧【先の見えない治療】 ・手術が上手くいかず、直後に再手術が決まった時はショックが大きかった。	b-⑪【先の見えない治療】 ・退院の目的が立たない中で、どのような進路を選ばよいか、誰に相談すればよいか悩む。
		a-⑨【地元校や友だちとの関係の途切れ】 ・友だちからの連絡が最近なくなり忘れられたと感じる。	b-⑫【地元校への遠慮】 ・30人以上担当していらっしゃる中、在籍していない身なのでお願いしづらいところがある。
		a-⑩【地元校の情報不足】 ・地元校の様子が分からない中でのオンライン授業で緊張した。	b-⑬【治療と並行した受検準備への不安】 ・支援学校で高校受検の対応をしてもらえるのか不安がある。
	感じ安なこと	a-⑪【少人数の学習環境】 ・少人数の授業で内容が分かりやすく質問しやすい。	b-⑭【体調等に応じた授業設定】 ・体調に応じて授業の場所や内容を変えてくれるので、安心している。
		a-⑫【特別支援学校教員との密なコミュニケーション】 ・先生と相談する時間が確保されている。	b-⑮【特別支援学校教員との密なコミュニケーション】 ・先生が色々な話を聞いて下さり心の支えになった。
		a-⑬【特別支援学校教員の経験への信頼】 ・病気に理解のある先生たちに教わることに安心している。	b-⑯【特別支援学校教員の経験への信頼】 ・様々な状況のお子さん達を見てこられた先生方の経験を信頼している。
		a-⑭【地元校や友だちとの関係維持】 ・部活の顧問の先生が異動した後も連絡をくれて嬉しかった。 ・SNSを通じて、友だちと継続的に連絡を取れている。	b-⑰【地元校や友だちとの関係維持】 ・地元校担任から連絡をいただくと安心する。
		a-⑮【地元校行事への参加】 ・地元校の修学旅行に参加できて嬉しかった。	b-⑱【地元校行事への参加】 ・修学旅行に行けたという思い出ができて良かった。
	要望		b-⑲【特別支援学校教員からの地元校との関係継続の促し】 ・地元校とのつながりの継続を特別支援学校担任に促され、地元校と関係を継続できた。
		a-⑯【特別支援学校(病弱)の授業や行事の充実の要望】 ・治療の関係で出られない授業も、本当は出席したい。 ・体育館でのドッジボールや家庭科の調理実習をやりたい。	b-⑳【特別支援学校(病弱)の授業や行事の充実の要望】 ・体調に応じて授業数を増やしてほしい。
		b-㉑【地元校行事参加のマニュアル整備の要望】 ・地元校の修学旅行に参加するためのマニュアルがあると動きやすい。	
入院後期	感じ不安なこと	a-⑰【地元校での新しい人間関係への不安】 ・入院初期に関係が途切れてしまい、戻るとの人間関係が不安。	b-㉒【地元校での新しい人間関係への不安】 ・入院中に進級したことで、友だちがいるクラスに戻れるか心配。
		a-⑱【身体変化への級友の反応】 ・髪がないこと等、クラスにバレたくない	b-㉓【地元校内での情報共有の不足】 ・地元校の中で情報が共有され、配慮してもらえるか不安。
		a-⑲【再発への懸念】 ・接触等で怪我が悪化することが怖い。	
	感じ安なこと	a-⑲【復学支援会議の安心感】 ・会議を行ったことで不安が軽減された。	b-㉔【復学支援会議の安心感】 ・地元校の先生に主治医から直接注意事項を伝えてもらえてよかった。
要望	a-㉔【地元校との情報共有の要望】 ・医療上の制限や学習進度等を地元校の先生に伝えてほしい。	b-㉕【地元校との情報共有の要望】 ・医療上の配慮など地元校担任に共有してほしい。	

関東甲信越地区の特別支援学校(病弱)における復学支援の取組に関するアンケート

【調査目的】

本アンケートは、関東甲信越地区の特別支援学校(病弱)における児童・生徒の復学支援の現状と課題を把握し、今後のより効果的な復学支援体制構築のための基礎資料とすることを目的としています。

神奈川県立横浜南支援学校においては、入院初期の復学支援が十分ではないという課題があり、他校の実践や工夫を参考にすることで、支援の充実を図りたいと考えています。

調査結果については、学校や個人が特定されないように配慮いたします。

なお、本アンケートの結果と研究成果について、後日、情報提供いたします。

【回答対象者】 支援会議等をコーディネートする御担当の方

【回答方法】

下記 URL もしくは二次元コードから御回答をお願いします。

<https://forms.office.com/r/X2GUjnLUXL>



【回答期限】 令和7年10月3日(金)

【用語について】

病弱校：アンケート内では、「特別支援学校(病弱)」、「病弱特別支援学校」は病弱校と表記

復学：入院等で病弱校に転学した児童・生徒が、療養の終了等で、入院前に在籍していた学校に戻る

復学支援：病弱療養児に対して復学に向けて行われる教育支援全般のこと

地元校：前籍校、原籍校のこと

支援会議：児童・生徒に関わるケース会議、カンファレンス等含む

コーディネーター：特別支援教育コーディネーター、教育相談コーディネーターなどそれに準ずる人

【時期の捉えについて】



転入初期：転入日から30日程度

転入中期：転入初期と後期の間の期間

転入後期：退院の見通しが立ってから退院するまでの期間

【I. 基本情報】

1. 学校名を御記入ください。
2. あなたの役職、分掌業務を教えてください。(例 教諭・コーディネーター)
3. あなたの病弱教育部門における経験年数を教えてください。

(質問 17 で “保護者が地元校に求めていること” にチェックが入った方のみ)

18. 保護者が地元校に求めていることを、地元校と共有していますか？

はい いいえ

19. 転入中期に、保護者から情報を聞き取る方法には、どのようなものがありますか？(複数回答可)

日常的なやり取り 個別の相談時間の設定 調査用紙への回答 支援会議等
その他 ()

20. 転入中期に、地元校と共有・確認する情報はどのようなことですか？(複数回答可)

学習面について 入院中の様子について 配慮事項について 今後の連携について
その他 ()

21. 転入中期に、地元校と情報を共有する方法には、どのようなものがありますか？(複数回答可)

電話でのやり取り メールでのやり取り 調査用紙への回答 支援会議等
その他 ()

22. 上記以外で、転入中期に児童・生徒に対して行っている復学を見据えた支援があれば教えてください。
(記述)

()

23. 転入中期に、児童・生徒に対して行っている復学を見据えた支援で課題に感じることがあれば教えてください。
(記述)

()

【IV. 転入後期(退院の見通しが立ってから退院するまでの期間)に関すること】

24. 転入後期に、児童・生徒から聞き取る情報はどのようなことですか？(複数回答可)

(不安や学校に求めていること以外は、“その他” に具体的にお書きください。)

学習への不安 入院生活への不安 進路への不安 病気への不安
本人が病弱校に求めていること 本人が地元校に求めていること(質問 25 へ)
その他 ()

(質問 24 で “本人が地元校に求めていること” にチェックが入った方のみ)

25. 本人が地元校に求めていることを、地元校と共有していますか？

はい いいえ

【V. その他】

34. 貴校が地元校と連携する上で、工夫している取組があれば具体的に教えてください。（記述）

35. 貴校が地元校と連携する上で、課題に感じるものがあれば教えてください。（記述）

質問は以上です。回答内容について、個別にお問い合わせする場合がございます。
御協力ありがとうございました。

横浜南支援学校における復学支援の取組に関するアンケート

【調査目的】

本アンケートは、横浜南支援学校における児童・生徒の復学支援の現状と課題を把握し、今後のより効果的な復学支援体制構築のための基礎資料とすることを目的としています。

調査結果については個人が特定されないように配慮して扱わせていただきます。

【回答対象者】 横浜南支援学校 教職員

【回答期限】 令和7年9月12日（金）

【用語について】

復学支援：病気療養児に対して復学に向けて行われる教育支援全般のこと

地元校：前籍校、原籍校のこと

復学支援会議：本校が退院前の児童・生徒に実施している会議のこと。（こころ病棟が実施しているケース会議等は含まない）

【時期の捉えについて】



転入初期：転入日から30日程度

転入中期：転入初期と後期の間の期間

転入後期：退院の見通しが立ってから退院するまでの期間

【I. 基本情報】

1. あなたの現在の所属を教えてください。

小学部 中学部 重心部門小学部 重心部門中学部 重心部門高等部 その他

2. あなたの役職を教えてください。（複数回答可）

担任 級外 教育相談コーディネーター その他（ ）

3. あなたの横浜南支援学校での勤務年数を教えてください。

1～3年 4年～

【II. 各時期の復学支援の取組について】

4. あなたが考える復学支援には、どのようなものがありますか？（記述）

[]

5. 質問4の回答の中から、転入初期（転入日から30日程度）から行っているものがあれば教えてください。（記述）

（記述欄）

6. 質問4の回答の中から、転入中期（転入初期と転入後期の間の期間）から行っているものがあれば教えてください。（記述）

（記述欄）

7. 質問4の回答の中から、転入後期（退院の見通しが立ってから退院するまでの期間）から行っているものがあれば教えてください。（記述）

（記述欄）

【Ⅲ. 復学支援会議について】

8. あなたは復学支援会議に参加したことがありますか？（司会、記録、担任全て含む）

はい いいえ（質問14へ）

9. あなたが復学支援会議に参加した回数を大まかにお答えください。（司会、記録、担任全て含む）

1～5回 6～10回 11～15回 16～20回 21回～

10. 現在行われている復学支援会議の内容を重要度の高いと思うものから順に番号を振ってください。

() 医療情報の共有 () 本人の願いや思いについて () 保護者の願いや思いについて

() 復学後の学校生活について () 横浜南での学習の様子・進度について

11. 復学支援会議を本校が運営する上で課題に感じることはありますか？

はい いいえ（質問13へ）

12. 復学支援会議を本校が運営する上で課題に感じることはどのようなことですか？（複数回答可）

日程調整 医療者とのやり取り 地元校とのやり取り 本人の願いや思いの聞き取り

保護者の願いや思いの聞き取り 会議の内容 会議の進行方法 会議の記録方法

その他（ ）

13. 今後、復学支援会議をより良いものにするためには、どのような取組が必要だと思いますか？（記述）

【IV. 復学支援全般について】

14. 児童・生徒がより円滑に復学できるようにするためには、どのような取組が必要だと思いますか？（記述）

質問は以上です。御協力ありがとうございました。